

## 書、何を写すのか、何を書くのか。

——上代様、西行・俊成・定家における歌と書——

### 一、書を見る

イ、書風（全体像）  
ロ、字形（基本点画法）  
ハ、連綿法

二、運筆法

ホ、行法

ヘ、墨法（濃淡、墨継）

### 二、歌について

イ、万葉調——万葉集（八世紀末）

ますらをぶり——力強く写実的で素朴、まこと

ロ、古今調——古今和歌集（九〇五～九一三年位）

たをやめぶり——優美、繊細、女性的、理知的、技巧的、觀念的、姿態美、計算しつくされた  
歌——みやび あはれ

紀貫之（八六六？～九四五？）他

仮名序（紀貫之）

「やまと歌は人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。」「ちからをもいれずしてあ  
めつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこをむなのなかをも  
やはらげ、たけきものふの心をもなぐさむるは、うたなり。」

「わが宿の池の藤波咲きにけり山ほどとぎすいつか来鳴かむ」 よみ人しらず

### 貫之

「むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」

ハ、新古今調——新古今和歌集（一一〇五年頃）

情調的、幻想的、絵画的、技巧的、幽玄、有心

西行（一一八一一九〇）・藤原俊成（一一四一一二〇四）・藤原定家（一一六一一一四一）

仮名序（藤原良経）

「色にふけり心をのぶるなかだちとし、世を治め民を和らぐる道とせり。」

（注）和歌は世の中を治め、民衆に平安をもたらすための道としての政治的役割を与えられた。

### 俊成

「またや見む交野のみ野のさくらがり花の雪散る春の曙」

### 西行

「よしの山こそしほりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねん」  
「ながむとて花にもいたくなれねばちるわかれこそかなしかりけれ」

「みちのべにしみづながるゝやなぎかげしばしとてこそたちとまりつれ」  
「こゝろなき身にも哀はしられけりしがたつさはの秋のゆふぐれ」  
「おもかげのわするまじきわかれかななごりを人の月にとゞめて」

## 定家

「春の夜の夢の浮橋とだえして嶺にわかるる横雲の空」

「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦のとまやの秋の夕暮」

「かきやりしその黒髪のすぢごとにうち臥すほどは面影ぞたつ」

「白妙の袖の別れに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く」

「おほぞらは梅のにほひにかすみつづくもりもはてぬ春のよの月」

## 「さび」の美

「たまゆらの露も涙もとどまらずなき人恋うる宿の秋風」(三一一歳)

「旅人の袖ふきかえす秋風に夕日さびしき山のかけはし」

「わくらばに問われし火とは昔にてそれより庭のあとはたえにき」

「人とわぬ冬の山路のさびしさよ垣根のそばにしとどおりいて」

「まつ人の麓の道はたえぬらん軒ばの杉に雪重るなり」

## 「和歌とは心を詞にしたものである」「書は心画なり」

言心聲也

書心畫也

聲畫形

君子小人見矣

言は心の声なり

書は心の画なり

聲画形(あら)われて

君子小人見ゆ

言葉は心が発する声であり、

書は心を表す画であり、

聲葉を聞き書を見れば、

君子か小人かが分かる

揚雄(紀元前五三年～一八年)の著書「法言」より

## ・ 作者と世界との関係

自然(宇宙)

社会、

人(自己)と他者

## 《参考文献》

- ・ 図説日本書道史(芸術新聞社)
- ・ かな百科(芸術新聞社)
- ・ 日本名筆選43 更級日記(二玄社)
- ・ 日本名筆選44 山家心中集(二玄社)
- ・ 日本名跡叢刊近代秀歌(二玄社)
- ・ 原色かな手本3・4・5・8・9・10(二玄社)
- ・ 書道全集13・18・19(平凡社)
- ・ 冷泉家時雨亭叢書明月記1・5